



Woman of YAMAGATA

これからの 「仕事」の 話をしよう



令和4年度 山形大学 基盤共通教育の授業
「キャリア形成とワークライフバランス(山形から考える)」探究ノート

《 講義内容 》

- | | | |
|--------------------------|--------|-------------------------|
| 01 “楽しむ”ことを第一に | 草苺 早苗 | 山形市環境部部長 |
| 02 医×食×農の融合スキルで“食事チャレンジ” | 五領田小百合 | 学術研究院助教(農学部担当) |
| 03 「世間」から考えるキャリアの歩み方 | 小倉 泰憲 | 学術研究院教授(理学部担当) |
| 04 負担から可能性へ | 藤田 愛 | 学術研究院准教授(医学部看護学科担当) |
| 05 絶えない探究心とキャリア形成 | 摂津 隆信 | 学術研究院准教授(人文社会科学部担当) |
| 06 知識は力なり | 宮 瑾 | 学術研究院准教授(有機材料システム研究科担当) |
| 07 自分の好きが重なる仕事と生活のバランス | 佐藤 琴 | 学士課程基盤教育機構教育企画部附属博物館 |
| 08 両立にあたっての「計画」と「協力」 | 池田 彩乃 | 学術研究院准教授(地域教育文化学部担当) |

“楽しむ”ことを第一に

10月19日(水) 14:40~16:10

講師

草薙 早苗

山形市環境部部長

Profile

50歳代
山形県出身

山形市役所1988年採用。まるごと推進課長、地籍調査室長、山形市男女共同参画センター所長を経て2022年度より現職。自然環境及び生活環境の保全並びに美化緑化運動を推進する。家族は義母と専業主夫の夫、高校生の息子。

●就職した動機と仕事の内容

結婚後も勤務できる職場として公務員を志望し山形市役所に就職。林務課—教育委員会学校教育課—環境課—教育委員会管理課—まるごと推進課—地籍調査室—男女共同参画センター—環境部と異動により様々な行政を務める。現在は、環境部部長として持続可能な環境社会実現に取り組む。

●これまでの道のり

生まれも育ちも山形市。山形大学農学部で林学を専攻し、1988年に女性初林業技師として就職した。平成2年には山形県で初の女性森林インストラクターとして野外活動などの指導にあたった。その後、内部異動で教育業務や環境保護活動、人事労務管理やイベント運営など多様な業務を経験し、行政の業務は幅広く、転職したくらいに多くの経験が出来ることを実感した。

●ワーク・ライフ・バランス

結婚すると女性だけが大変だと思い結婚願望は無かった。ただ出産願望だけはあったので35歳で結婚し40歳で出産。現在高校生の息子が一人。「人生楽しんだもん勝ち」がモットーで、趣味も仕事も子育ても何でも楽しめば、自ずとワーク・ライフ・バランスになると思う。

●夢や目標

「男女共同参画」という言葉が無くなり、男性や女性、多様な人達が性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できて生き生きと暮らすことが出来るような山形市にしたい。

●学生へのアドバイス

どうせ何かやるのだったらその全てを楽しくやるのが良い。苦手や嫌いなことでも楽しくやる方法を考えること。自分でアレンジしたり、積極的にアイデアを出したりすることも大事。社会に必要な知識は働いてみるのが一番経験になるのでやってみよう。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

相手の立場に立って、自分だったらどう感じるか。男女ともにその共感力があれば男女共同参画社会は実現すると思う。



① 仕事でストレスがたまった時はどのように解消しているか

A 私生活を充実させることがストレス解消になっている。仕事は楽しい時もつらい時もある。本当に大変な時は一人で抱え込まないことが大切。

講義の振り返り

📖 仕事と家庭に加え個の自分も大切に、3つのバランスを保って生活することが大事だと学んだ。

📖 「どんな経験でも身になる。どんな失敗も経験値としてプラスになる。」というお話を聞き、苦手なことをいかに楽しくするか考える方法を知ることが出来た。

📖 「突き放さないことが大事」という言葉のように、性別に関わらず一人一人が最大限の力を発揮できる環境作りをすることが大切だと思った。

📖 ワーク・ライフ・バランスを意識する上で、自分が心地よいと思えるバランスを保っていきたいと思った。

📖 大学生のうちから自分の強みを持っておくことが、他人から必要とされるための一つの武器になると考えさせられた。

📖 山形市の男女共同参画では、いろいろな課題が存在しており、それに対して色々な調査や対策をしていてこれから変わっていくのかと思った。

医×食×農の融合スキルで“食事チャレンジ”

10月26日(水) 14:40~16:10

講師

五領田小百合

学術研究院助教(農学部担当)

Profile

30歳代
広島県出身

専門は行動学。医食農融合型の学際研究をしている。国内外の大学院、官公庁系の研究所、民間企業を経て2021年に山形大学に着任。食に関する課題を楽しく解決する方法を模索してみたいと思っている。

●就職した動機と仕事の内容

食と健康に関わる研究に従事してきた過程で、今後食糧不足になることを聞きつけ、食料生産現場のリアルを知るために、2020年4月に庄内に移住し、農業研修を1年受けた。健康的な食生活を無理なく継続し、疾患予防に寄与したいという思いから、研究の力で支援したいと考え、現在に至る。

●これまでの道のり

中高は体を崩し、大学二浪を経験。大学の学部、大学の修士課程、博士課程(米国留学)とすべて異なる専門分野に進んだ。その経験が融合型研究を行っていく上での礎になっていると思う。また、官民学を渡り歩き、法人登記も経験した。食と健康に関わる研究に従事した際、食糧不足を知った。また、就農の厳しさを知り、研究の力で食分野を支援したいと思い現在の仕事に就いた。現在は、食事チャレンジという生活習慣病などの予防や改善させるための取り組みなどを行っている

●ワーク・ライフ・バランス

仕事を管理できるようなポジションに就けてからは、プライベートの時間も大切にできるようになった。

●夢や目標

出来るだけ沢山の人の幸せに役立つ仕事がしたいと思っており、現在は健康寿命延長などを目標に食の視点から活動している。また綺麗事を言い続けられる大人になりたいかたとの考えから、自身が先輩方にしてもらったことを学生に還元していきたいと思っている。

●学生へのアドバイス

自分を大切に、自分に素直に。余裕ができたなら周りを見てみよう。学生時代の過ごし方で人生は変えられる。キャリアを「掛け算」し、淘汰されないレア人材になろう。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

性はグラデーションという言葉があるように、男・女と明確に分けることは時代遅れな気がしている。ただし、女性にしか子供が産めない等の生理的な特徴があるので、そのあたりは十分考慮した就業制度が必要であると思う。



① チャレンジをするうえで
気を付けるべきこと

A 心の赴くままに生きよう。
でも自分勝手ではいけない。
常にプランAだけでなく、Bや
C、その次のことも考えて行
動しよう。

講義の振り返り

- 自身の人生をより柔軟に考えることが大切だと気付いた。専攻を一生固定するのではなく自身の興味関心によって変更していく生き方を知り、衝撃を受けた。
- 私も五領田さんのように自分自身を管理した上で周囲に気を配れる人になりたい。
- UFOキャッチャーのように自分から夢をつかみに行くという行動力をこれからの大学生活で養っていききたい。
- 学生時代の過ごし方で人生が変わるとのことだったので、様々なことに挑戦してみようと思った。
- 改めて思い切って挑戦することの大切さを学ぶことができた。
- 自分が先輩や指導教官にいただいたことを学生に還元するという素晴らしい志を持っていることに感銘を受けた。

「世間」から考えるキャリアの歩み方

11月2日(水) 14:40~16:10

講師

小倉 泰憲

学術研究院教授(理学部担当)

Profile

60歳代
岩手県出身

現在、学生や働く人を対象にキャリア教育やキャリアカウンセリングを実践。大学では音響工学を学び、エンジニアとしての勤務経験がある。また、キャリア開発に関するNPO活動に参加し、大学院では心理学を学ぶ。

●就職した動機と仕事の内容

東北大学大学院で5年間学んだ後、セコムに入社。22年半働くも、自分にとって新しい世界であるキャリアの世界で働きたいと考えようになり、大学のキャリア教育の教員に応募。その後山形大学理学部の教授に転職。現在はそこでキャリア教育を行なっている。

●これまでの道のり

岩手県久慈市で生まれ、大学では水中超音波、大学院では音響工学の研究をし、卒業後はセコムに入社し、不審者の侵入を発見するためのセンサーの研究や、声がかぎの代わりになるシステムの研究をした。その後キャリア開発に興味をもち、「日本キャリア・カウンセリング研究会」でNPO活動に参加。キャリアのことに関わるために心理学を学ぶ必要があると感じ、働きながら筑波大学の社会人大学院を修了。キャリアへの興味が強くなり、定年前にセコムを退社し、山形大学の理学部に採用され現在に至る。

●ワーク・ライフ・バランス

家族はワークファミリーバランス、個人はボランティア活動を含むワークライフバランスと呼ばれる。日本人はこれらが混合していることが多いという。日中は研究、夜や土日はキャリア開発の普及活動をしていた。50代直前までは会社の仕事、NPO活動、受験勉強から社会人大学院の学びの両立を図っていた。

●夢や目標

多くの人に色々な考え方を広めること。日本特有の文化である「世間」の良い面を増やし、負の面を減らすにはどうしたらいいのかということに取り組んでいる。

●学生へのアドバイス

人に迷惑を掛けてはいけないというこの悩みの多くは、世間の縛りからきている可能性がある。悩みの例に、他人と違う意見を主張しないことが好ましいとするような同調圧力があり、こうした悩みから逃れるためにも、西洋の価値観を参考にするなど多角的な観点を取り入れることは大切である。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

「世間」では、最近まで強い男尊女卑であった。このためタテマエでは男女共同参画社会と言われているが、未だに先進国の中ではジェンダーギャップが大きい国となっている。



❗ たくさんの行動や経験のなかに、後悔していることはありますか？

A 失敗をどう捉えるかは考え次第です。挫折が実は後の成功へのきっかけだったりすることもあります。私は道草を食っていたとも思いません。

講義の振り返り

私もライフ・プランニングの各要素をつなぐ「金の糸」、すなわちライフテーマをみつけたと思った。

日本の「世間」の負の面を理解しつつ、それをあまり気にしないで自分のやりたいことに集中して先の道を見据えることが大事だと感じた。

自分も先生のように「ライフテーマ」を見つけないと思った。少しずつ、自分を知るための行動や経験を積んでいきたい。

自分はまだまだ「絆モデル」での考え方しかできていないことがわかったので、これからは積極的に「城壁モデル」での考え方も取り入れていこうと思った。

ライフ・パターンの成功も失敗も人生の一部であり、その人生の断片を繋ぎ合わせるという考え方が参考になった。また、絆モデルと城壁モデルの考え方を知り、自分の中の日本社会に対する違和感がスッキリした。

負担から可能性へ

11月16日(水) 14:40~16:10

講師

藤田 愛

学術研究院准教授(医学部看護学科担当)

Profile

50歳代
宮城県出身

母性、助産学(女性・妊産婦の栄養や活動など)の研究をしている。病院・開業助産師、大学教員の傍ら東北大学大学院医学系研究科博士課程で学び、現職に就く。夫、子2人と暮らし、家事育児はいい加減がモットー。

●就職した動機と仕事の内容

総合病院の産婦人科で助産師として働いたのち、助産院を開業。元々、臨床が大好きだったが、この楽しさや助産師の必要性を学生に伝えたいと思い、大学教員になった。助産実習2か月、看護の実習5か月に加え講義と研究に日々追われている。

●これまでの道のり

小学校の頃から助産師になりたいと思っていたが、高校時代に一度考古学に惹かれた。しかし、初心に戻り、看護師と助産師の資格を取るために東北大学医療技術短期大学部で学んだ。結婚、出産後に、英文科のある大学に編入した。その後は山形大学大学院で修士、東北大学大学院で博士の学位を取得した。仕事は、産休、育休以外ずっと続けている。育児中、社会では理想はあっても実際のところは育児に対して厳しいことを実感したが、出産、育児が自分の可能性を広げたと考えている。

●ワーク・ライフ・バランス

その時の優先度に合わせて、バランスをとっている。例えば、子供が小さいときはできるだけ子ども優先にしていた。急な病気やキャンセルできない仕事などがある場合は、調整に苦労したが、“子育ては一人でするものではない”と思い周りにたくさん頼った。子どもが成長したら、逆にバランスをとるのが難しくなった気がする。

●夢や目標

出産のみならず女性の一生の健康を支援でき、かつ科学的根拠を持って仕事をする助産師を増やしたい。大学院で学ぶ女子学生を増やすのも目標。

●学生へのアドバイス

男性女性関係なく出産や育児を負担に捉えないで欲しい。1人だけで抱え込まず、周りの人達に頼ってみることが大切。自分自身のしたいことを我慢するのではなく、調和をとることが大切である。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

女性は男性と比べ妊娠出産、毎月の月経など、からだの変化が大きい環境である。幼いころから知識をもつと、お互いをいたわる社会になるのではないかなと思う。



Q 子育てで助けてもらって嬉しかったことは？

A 保育士に保育所での子供の成長を伝えてもらったこと。身内は助けてもらったというより子育て協同チームとして捉えている。

講義の振り返り

今回の講義を受けて、ワーク・ライフ・バランスについて深く考えさせられた。特に、出産・育児を「負担」ではなく「自らの可能性」として捉えることで自分自身の成長や周りとの関わり方を上手にバランス取れていることがすごいと感じた。

したいことに全力でチャレンジする姿勢に憧れを感じた。

「ワークライフインテグレーション」という見方によって、日常の様々な物事を天秤にかけるという印象を薄めて、色々なことにバランスよく取り組めるのだということが分かった。

助産師という仕事を子育てに活かしていて、仕事と家庭の両立の形を聞くことができた。

経歴を聞いている中で、社会では理想はあっても実際のところ、育児に対して厳しいのだと感じた。そういった難しいものの中で、自分に合った働き方を見つけたのがすごいと思った。

To Doリストにあえてチェックをつけないという方法が意外だった。やることをできなかった自分を責めるのではなく、仕方がなかった場合は割り切ってあまり気にしないようにすることも大事だと気づいた。

絶えない探究心とキャリア形成

11月30日(水) 14:40~16:10

講師

摂津 隆信

学術研究院准教授(人文社会科学部担当)

Profile

40歳代
熊本県出身

専門はドイツ文学。ドイツの喜劇役者カール・ファレンティンの研究をしている。2014年に山形大学に赴任。家族は妻一人息子一人。料理と掃除以外の家事を担当。趣味はネット麻雀と週二日のサウナ通い。

●就職した動機と仕事の内容

山形大学でドイツ語とドイツ文化に関する教育研究活動を行っている。大学生活を送っていた90年代は「就職氷河期」とよばれ就職難が続いていた時代であり、「それなら大学院に行って研究を続けよう」と思い、それからドイツ文学の研究を突き詰めてきた。

●これまでの道のり

熊本県出身で高校は親元を離れ、寮生活。大学ではドイツ文学を専攻した。初めはドイツ文学を専攻しようとは思っていなかったが、訳あって専攻することになり、ドイツ文学の面白さに気づいた。大学は、大学院、ドイツ留学を含めると14年在籍した。2008年3月に結婚、同年11月に息子誕生。2009年秋~2011年2月までドイツで暮らし、2011年から東京で非常勤講師と塾講師のアルバイトの掛け持ちをして働きながら、家事・育児もこなす。山形大学着任は2014年4月から。

●ワーク・ライフ・バランス

極力「無駄な仕事はしない」「テレビを見ない」「趣味はやることやった後」を心がけている。時間が限られているため、隙間時間を利用している。通学などの隙間時間でニュースをチェックし世の中の出来事を知るなど、学生も隙間時間を有効に使うべきだと思う。

●夢や目標

研究や新しい事象についての興味関心を失わない人間であることが目標であり、大人になっても勉強は怠らない。

●学生へのアドバイス

ドイツと違い日本は残業が多く未だに働きすぎの人々が多いが、これから社会に出て働く学生たちには出来るだけ同調圧力を無視し、その危機感を理解してくれる仲間を増やすことで働きやすい社会に変えていって欲しい。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

理念自体にはもちろん賛成である。男は外で働き女は家事に専念なんてことはもはや神話であり、共働きが当たり前の社会になりつつあると思う。



❗ 今まで挫折したことや苦労したことはありますか？

A 人生は長く続くため物事の捉え方を変えていくべきである。失敗を上手く活かしていければ挫折にはならないと思う。

講義の振り返り

- 先生のお話を聞き、自分が本当は何をやりたいのか目標を見失うことなく仕事をし、さらに仕事だけでなくプライベートの時間も大切にしたいと思った。
- 代わりはいくらでもいるが、自分にしかできないことがある、という言葉聞いて、自分が興味あることややりたいことを大事にして、突き詰めたいと思った。
- 自分1人で対処しきれないような壁にぶつかったら潔く諦めて次に進むのも一つの方法である事が分かった。
- 自分が興味を持ったことに対してとことん突き詰める探究心が生きていくうえで大切であると感じた。
- どれだけ忙しくても家事育児やプライベートを大事にできているのは、自分のルールをしっかり決めていたからだと感じた。
- 「失敗をうまくいかせたら挫折にならない」という言葉に勇気もらった。私は失敗したことを反省して次の行動にいかせたことがあっても、「失敗は失敗」と捉えていた。それよりも摂津先生のように考えた方が、失敗が怖くなくなり、たとえ失敗したとしてもそれをいかそうとする意識がより高くなりそうだと思うため、今後はそのように捉えたい。

知識は力なり

12月7日(水) 14:40~16:10

講師

宮 瑾

学術研究院准教授(有機材料システム研究科担当)

Profile

40歳代
中国河南省
出身

専門は高分子科学。有機材料の分野でゲルの研究をしている。大学院を修了後、博士研究員、民間企業を経て、2012年に山形大学に着任し、2015年に研究室を立ち上げた。夫婦で世界各地を観光してみたいと思っている。

●就職した動機と仕事の内容

自由な発想と自分のアイデアで研究できることに魅力を感じて大学教員の仕事につくことになった。現在は山形大学工学部の教員として教育、研究、学内外業務に携わっている。

●これまでの道のり

中高生時代から化学が面白いと思い、当時もっとも新しい高分子材料分野を志望した。中国河南省にある鄭州大学で修士取得後、岡山大学の博士課程に入学した。博士学位を取得後、ポスドク、会社員を経験した後、山形大学に赴任し、現在に至る。

●ワーク・ライフ・バランス

結婚後、仕事を持つ夫との時間を確保するために、仕事をするときは集中して効率よく行うよう努めている。仕事以外のときは、家族と過ごす時間を大事にしている。

●夢や目標

仕事においては、良い研究をし、多くの優秀な人材を輩出したいと考えている。私生活においては、家庭菜園などの趣味を家族と楽しみ、たまには、ゆっくりと旅行に行きたいと思っている。

●学生へのアドバイス

仕事でも私生活でも自分なりの考えを確立し、行動してほしい。自分の「座右の銘」として、①Knowledge is power.知識は力なり(常に学び続ける)、②Failure teaches success.失敗は成功のもと(失敗しても挑戦する)、③Where there is a will, there is a way.なせば成る(希望を持つ)の3つの格言を大事にしている。私の研究室には、学生向けに「宮研究室是」を示しているが、学生には、これを卒業して自分なりの行動指針を確立してほしいと思っている。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

中国では仕事をしている男性も家事をするのが当たり前だが、日本人の夫と結婚して、また、義理の父母の様子を見ると、日本は違うと感じる時もある。私生活が仕事における「男女共同参画」の妨げにならないよう、職場だけの「男女共同参画」では、本当の意味での男女共同参画社会の実現は難しいのではないのでしょうか。



Q 自分の中で座右の銘を意識し始めたのはいつからですか。

A 大体高校生のときからで、ひとつの座右の銘を貫くのではなく、そのときの気分や目標に合わせて設定している。

講義の振り返り

● 座右の銘に対する考え方を聞いて、自分にとって座右の銘は人生を通して設定するものだと思っていたが、少し身近に感じられるようになりました。これから頑張りたいことができたときは、なにか良い言葉を探してみたいと思う。

● 先生は自伝を読むのがいろんな人の考えを知れて好きだとおっしゃっていたので私も読んでみようと思った。

● 自分の考えを確立し行動すること、失敗してもいいので挑戦することを心がけたい。

● 回り道で迷っても、その場その場で最善を尽くす、という言葉が印象に残った。自分のやろうとしていることは正しいのか分からなくなることは多々あるが、その時に最善を尽くせば後になっても後悔することはないと思うので、迷ったときはこの言葉のように行動したい。

● 宮先生のお話の中で、自己修復できる多機能性結晶ゲルがあることに驚いたし、またカイロの穴を感温性ゲルによって穴のサイズを調整する研究も行っていると知り、とても実用的で興味深い研究だなと思った。

自分の好きが重なる仕事と生活のバランス

12月14日(水) 14:40~16:10

講師

佐藤 琴

学士課程基盤教育機構教育企画部附属博物館

Profile

50歳代
宮城県出身

専門は日本美術史、博物館学。東北大学大学院博士課程前期終了後、宮城県に入庁。東北歴史博物館学芸員を経て2011年に山形大学着任。仙台市で一人暮らし。趣味は着物。

●就職した動機と仕事の内容

大学で日本美術史を専攻したところ、恩師と卒業した先輩方が博物館や美術館の学芸員として就職していたことを知り志した。現在は山形大学附属博物館の学芸業務と、学芸員資格を取得するために必要な博物館に関する科目を教員として担当している。

●これまでの道のり

石巻で過ごした中高生時代から美術に興味があった。バブル経済が崩壊した年に大学4年生となる。就職活動の全敗を経て大学院に進学する。修士修了時に運良く地元の県立博物館建設準備業務に携わる学芸員募集があり、応募したところ採用された。博物館の立ち上げから運営まで15年間勤めた後、山形大学に赴任。

●ワーク・ライフ・バランス

仕事過多だが、依頼が多いのはありがたいと感じている。一人暮らしであるからこそバランスも自分で決定できてノンストレス。また、2019年ごろから「家事はこうあるべき」の重圧を脱したため生活はとても楽。

●夢や目標

「博物館とは社会が人類とその未来を信じている証」を広めたい。

●学生へのアドバイス

「幸せとはこうあるべき」の先入観にとらわれず、自分の幸せを探究してほしい。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

男女共同参画は一人一人が幸せを感じられる社会に変えていく取り組みの一つだが、「こうあるべき」ととられすぎると幸せから遠ざかってしまうものだと思う。現状に即した改革を少しずつ実施していくことが必要だと感じている。



① 大学時代のエピソードについて教えてください。

A 日本美術史など、日本の古い文化を知ることに関心があったため能サークルに入っていました。

講義の振り返り

先生の仕事過多に対してもありがたみを持つような考え方が印象的だった。

仕事が多いとしてもそれが自分の好きと重なれば生活とのバランスが取れる、そして仕事の多さは他の文化、考えを持つ人との交流を促してくれるということに気付くことができた。

今回講義を聞いて、自分の好きなことを職業にして生きていける素晴らしさを学びました。実際、自分の好きなことを職業にすることは難しいはずですが、佐藤さんは東北歴史博物館の仕事にチャレンジしたことでその当時から、今現在も自分の好きなことを職業として働いています。やはり自分が好きなことであればモチベーションが高く、そしてやりがいも特別感じるだろうと思います。

「これからがこれまでを決める」という言葉はとても印象的でした。私はこれまでがこれからを決めるという考えをずっとしてきましたが、今を一番大事にすべきなのだと気づかされました。

両立にあたっての「計画」と「協力」

12月21日(水) 14:40~16:10

講師

池田 彩乃

学術研究院准教授(地域教育文化学部担当)

Profile

30歳代
東京都出身

専門は肢体不自由児の教育。筑波大学院修了、特別支援学校を経て、2020年山形大学に赴任。家族は、夫と子供3人(小3、小1、1歳)。私の転職を機に夫は公務員を辞め、飯田キャンパスで事務員に転職。

●就職した動機と仕事の内容

特別支援学校の教員として働いていたが、障害のある児童生徒に対してできることに限界を感じ、研究的な側面や広い視野を持った立場で特別支援教育に貢献したかった。肢体不自由教育に関わる研究活動、特別支援学校教員免許状取得を目指す学生の指導にあっている。

●これまでの道のり

大学で始めて心身障害学について知り、興味を持った。小学校、大学とサッカーに打ち込んでいたこともあり、「運動」に興味があったため、肢体不自由の分野を専攻した。大学院まで進んだが、途中で休学し、大学附属特別支援学校(肢体不自由)教員として6年間勤務した。勤務しながら学位を取得した。子ども達から多くのことを学んだが、大学院での研究と実績をより結びつけるような立場で働きたいと考えようになった。そのような時に、山形大学の教員公募の話聞き、挑戦した。

●ワーク・ライフ・バランス

家事・育児と仕事とのバランスは常に悩んでいる。学校教員時代は、自分の子どもの行事は行けないことも多かったが、今の仕事は比較的自分の裁量で仕事を調整できるので、そのようなことはなくなった。家庭との両立に関しては、すべてを完璧にこなそうと考えないことでずいぶん精神的に楽になることができた。

●夢や目標

地域の特別支援教育の充実に貢献できるように頑張りたい。また、子ども達が山形県に来てよかったと思ってくれるように、育児に関しても自分なりに丁寧に行っていきたい。

●学生へのアドバイス

私が教育実習の際に指導教員に言われたことだが、「仕事も家庭もやりたいなら全部欲張った方が良い」という言葉だ。仕事も家庭も、自分がやりたい、と思ったことなら、すぐに「両立は無理かも」と思わず、どうしたら実現できるかを考えてほしい。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

育児に関しては、まだまだ「お母さん」の役割という意識が根強い。何気ない周囲の一言が女性はもちろん、育児をしたい男性にとっても障壁になっていると感じている。



① 特別支援学校の教員から大学教員になり変わったことはありますか。

A そもそもやっていることが異なります。研究では客観的に障がい者を見るため、直接的にかかわることは少し異なります。

講義の振り返り

📖 「できない理由を探すよりどうしたらできるかを考える」という話を聞いているんなことに挑戦しようと思った。

📖 ワーク・ライフ・バランスを取るために、「べき」や「ちゃんと」を捨てることやできる人ができることをやるということが重要と思った。

📖 一言で救われたり傷つけたりすることがあるため、自分もこれから気をつけようと思った。

📖 夫が非常に協力的なこともあり手厚いサポートがあったが、常識的に母親に役割を押し付けようとするバイアスがまだまだ多くあり、そのようなバイアスをなくしていくことを目指しているべき社会ではないかと思った。

📖 育児と仕事の両立の話では、自分の中にあるバイアスに気付いてこだわりを捨てるということが印象に残った。知らないうちに築かれているバイアスや無意識の役割を完全に捨てることは難しいけど、ワーク・ライフ・バランスを達成したり男女平等な社会を作っていくためには必要なことだと思った。

山形大学男女共同参画基本計画(第2次)の施行

山形大学は、令和2年4月に山形大学男女共同参画基本計画(第2次)を施行しました。第2次基本計画では、令和2年度から10年間を計画期間とし、男女共同参画とダイバーシティを一層推進することを目的に、基本方針及び具体的施策を定めています。女性教員比率や女性管理職比率に関するより高い目標を掲げ、「無意識のバイアス」や性的指向・性自認等への配慮なども明記しました。また、「多様な性に関するガイドライン」を策定し、研究・仕事と家庭生活の両立支援制度の充実を図りました。今後も、ダイバーシティを推進するため、地域や県内外の大学等とネットワークを拡大していきます。



探究学習で学ぶキャリア形成

【授業名】

山形大学 基盤共通教育

「キャリア形成とワークライフバランス (山形から考える)」

【授業の目的】

- ①ワークライフバランスについて考え、自分のキャリア・ビジョンを描く。
- ②男女共同参画社会を理解し、課題を考える。
- ③新聞学習で社会人基礎力を身につける。

【授業の計画】

- いろいろな分野のゲスト講師による貴重な講義。
- 講師への事前質問や進行などを学生が担当。
- グループごとに課題探究学習を行う。
- 新聞切抜きレポートに取組む。
- 自分の考えを発表する。
- キャンパス保育所の見学、地域との交流。

【学生の感想】

- ★文系や理系分野を問わず、経験豊かな先生方の話を聞くことができ、男女共同参画社会の一員として、将来の職業のことだけでなく、視野を広げたキャリア・ビジョンを持つことができた。
- ★この授業を選んだ理由は、大学生になっても自分のキャリアを明確にできずにいたからだった。自分の将来を考えられるだけの知識や気づきを得ることができ、ためになり、楽しく有意義な時間だった。
- ★ワークセッションでグループの人との意見交換や他の学部の人々の考えを聞くことができ、とても視野が広がった。
- ★先生方のお話から、自分の中の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に気づくことができ、価値観や考え方に成長がみられた。
- ★ワークライフバランスに関して、仕事・家庭・個人の3つの要素のバランスが大事だという話を聞いて、ハッとさせられた。

男女共同参画とは

「男女共同参画社会基本法」

(平成十一年六月二十三日法律第七十八号)

第一章総則(目的) 第一条

- ・男女の人権の尊重
- ・社会経済情勢の変化に対応できる豊かで活力ある社会を実現する緊要性
- ・基本理念を定め、並びに国、地方公共団体及び国民の責務
- ・施策の基本となる事項を定めることにより、男女共同参画社会の形成を総合的かつ計画的に推進

山形大学は、「男女共同参画社会基本法」の理念に基づき、男女共同参画のために大学が担うべき役割と責任を自覚し、「山形大学男女共同参画基本計画」(平成22年)を策定し、男女共同参画を推進してきました。令和2年度から第2次基本計画に従って、さらに充実した取組を進めていきます。

性別にかかわらずに、すべての人が個性と能力を発揮できる世の中がダイバーシティ社会です。我が国では男女共同参画基本計画や科学技術基本計画等の下、男女共同参画や教育分野におけるダイバーシティ推進を図っています。山形大学は平成27年度に文部科学省のダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(連携型)に採択され、米沢栄養大学、大日本印刷株式会社研究開発センターと連携し、ダイバーシティ研究環境の実現に取組んできました。

この「キャリア形成とワークライフバランス」の授業は、男女共同参画を担う次世代を応援するため、ダイバーシティ推進室が担当しています。

令和5年3月3日発行

発行 山形大学ダイバーシティ推進室

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

TEL 023-628-4937

Mail yu-y-danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

編集 准教授 柿崎悦子